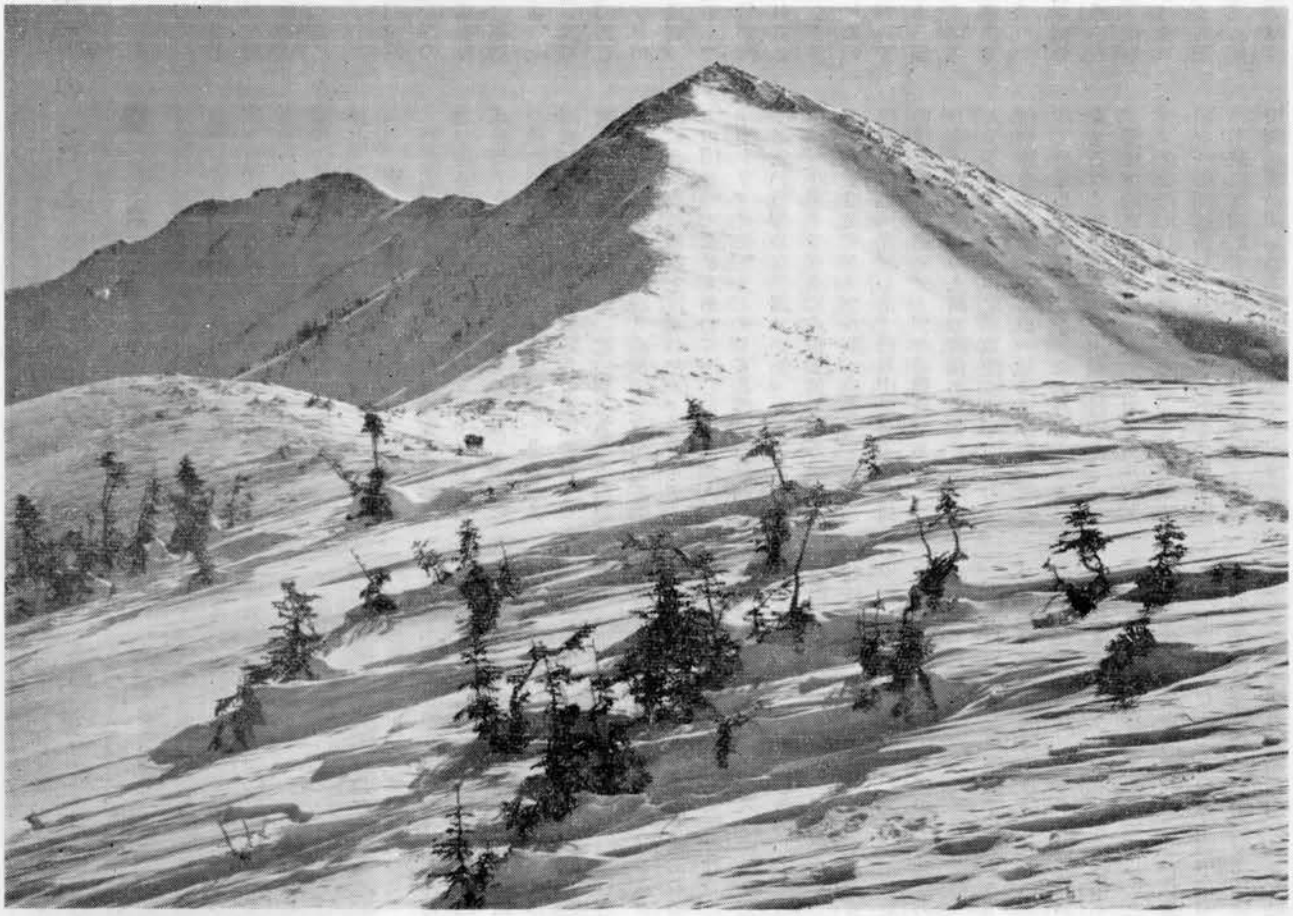
① 毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可(昭和35年7月26日)

山と博物館

第9巻　第3号　　1964年3月25日　　大町山岳博物館



街の美化

「ちょっとした善意の芽が、夏のさかりから秋にかけて、可れんな花、真実の小さな花びらを開かせています—中略—大町公園など、とかくいたずらされやすいところの花が折り取られたり、踏み荒されたりした形跡もなく咲いておりません」。これは街を美しくしよう会の通知書の抜すいである。

大町の街を美しくしよう会が生れてから、もう一年になろうとしている。発足した四月のある日、私もその結成式にのぞんだが、山博裏の記念碑の前にむしろを敷いて、市民各層の方々十数人が、規約や事業計画書をのぞきこんで、ひどく真けんに話し込んでいたのを思いおこす。

その後会員数もふえ、人の寝静まった早朝など山岳博物館や、大町駅前の清掃をつづけ花を植えたり、花壇をつくったりして、街の美化につとめてきた。そしてある時は市内のお宮や、遠く高瀬入七倉までも足をのばし缶詰の空缶や紙屑を片付けてきたともきいた。

しかし、まだまだ市内には町を美しくしよう会の手のとどかないところが多い。登山ブームやレジャーブームで一歩山に登り、観光地に踏みこもうものなら、空缶、紙屑が所せましと散らかっているが、これらの山岳や観光地まで手をのばすことはとうてい無理だろう。これには私たち地元にも責任はあろうが登山者や観光客の公徳心の欠除が最近特に目だってはいないだろうか。

そこに来る一人一人が、街を美しくしよう会のような気持になりたい。それでなければゴミ捨場などいくらつくっても同じことで、環境の美化などとうてい望めない。自分一人の自然ではない、美しい中で自然を楽しみたいと思う心は誰も変りはあるまい。いまさら新しいことではないが、いよ〳〵私たち個人個人が実行に移すときではないだろうか。オリンピックと黒部解放の年を迎えお互にいましめ合いたい。

（藤巻厚美）

「冬山講習会」のこと

福島　融

長野県岳連三十八年度最後の事業として「冬山とスキー講習会」が去る二月二十一日～二十三日迄の三日間地元白馬山岳会及び大町山の会の主管で、八方尾根にて行われた。以下その報告をしてみよう。

準備

受け入れ側の先ず当惑した問題は宿泊設備である。過去二回共すべてヒュッテ等既存の宿舎を使用したのであるが今回の場所は御存知の通り混雑を極め格安なヒュッテなど相談の外であるので止むを得ず幕営にふみきったこの方が主題の目的にはより近づいた形式で又前むきな姿勢でもあると考えたからであるそこで早速その線に沿って具体的なプランが組まれ、白馬と大町との仕事の分担も決まってそれぞれ連絡をとりながら計画を進めることにした。一月中旬実施計画予報第一号ができ上り岳連加盟団体に配付された。それによるとキャンプサイトは八方尾根薬大ヒュッテ前に定着する。露営用具は各参加団体において用意するが、一人で参加するものについては主催者側で用意するテントに余裕のある限りにおいて参加を認める。食糧については主催者において準備する。等の大綱が記され参加申込書を添付してメ切り日を待った。

二月十三日に一応メ切ったがその後も電話等の申込みがあり、ずる〳〵に応するうち役員及び指導員を合せて総勢九十余名にも達してしまった。（メ切方法は厳格に扱うべきである）そこで早速食糧調達に取りかゝり前記の人員分の食糧をあらかじめ組んだ献立に従って買い集めパッキングを終了できたのは開催前日の晩であった。その間大町で指導委員会を開き今回の講習の内容を雪中露営技術に主眼を置くことを申し合せ、指導方針の再確認をした。又計画予報第二号を印刷し日程表団体装備表及び食糧表を参加決定団体に送付した。

実施

当初食糧及び貸与装備は汽車で四ツ谷まで運び待ち受けた白馬山岳会のトラックで開会式場のケーブル駅まで運搬する計画であったがそれは余りにも甘い考えであり、あの殺人的なスキー列車に九十人分もの食糧を持って乗と込むことは不可能に近い話であるのに、そんな当然なことでさえ前夜まで気付かず眼前にうず高く積み上げられたパッキングケースの山を見て初めてあわて出し結局は知人の小型トラックをチャーターするのに三拝九拝するという惨めな手違いがあった。いよいよ当日、小型トラックに食糧装備を積み込み二名を添乗させてケーブル駅へ向わせ、我々は汽車で現地へ先行した。白馬山岳会でも会員のほとんどが白馬ケーブルの職員であるという事情から当初の人員の確保ができず大幅な人手不足で悩んでいた。取敢ず正午からの受付や開会式の用意のため一緒に飛び廻ったり漸く到着した食糧、テントなどをケーブルに乗せるべく駅に運び込む作業を行った。

受付が始まり参々伍々と大きなキスリングザックを背にした受講者が集まって来たが時刻を一時間延長しても、どうしたものか予定の半数にも満たず我々を焦らだたせた。そこで関係者が相談の末キャンプサイトへつく時刻が遅くなるという心配からこのまゝそこへ直行して現地（薬大ヒュッテ前）で開会式を行なうように急きよ変更した。我々の一団は白馬ケーブルの御配慮で荷物共ケーブルからリフトへと乗り次いで全員サイトへ集結したのは午后四時頃であった。直ちに各参加団体は持参の天幕を指示した位置に張り出したので鮮やかな色彩のテントが周囲の雪に映えて目を楽しませてくれた。しばらくする中に都合で遅れて到着したパーテーも張り終って総計十七、八張のテント村が出現した。いつの間にか小雪混りの吹雪が我々を包んだので慌ただしく開会式を済ませ続いて具体的な注意や指示を与えた。（この際我々指導員は大変な不手際を犯した。すなわち参加団体単位にパーテーを組むものは各団体の横の絡りを計るのに妨げになると考え各自に渡したゼッケン番号を無策意に組み合せてインスタントなパーテーに組み替え、それを当方の指示するテントに収容して大いに交流を計ったつもりだったが後述のような重大な結果を招く要因を作ってしまった。）又苦労して運び上げた食糧と燃料は各テント毎に手際よく分配され何時の間にか景気のいいラジウスの音と共に夕食の香りがあたりにただよった。ただこの露営形態ではミーテングが不可能なので指導員が各テントに配属されてそれを補った。翌二十二日早朝より予定通り行動するべく各テントは朝食の仕度に取りかゝっていたが一つのテントから慌ただしく本部へ連絡があったそこれによるとガソリンコンロの操作不なれのため火事を起こしテントが半焼したという全く予期せぬ出来事であった。幸い負傷者はなく大事に至らなかったのは不幸中の幸いであった。その後講習会は小雪の中ではあったがスケジュール通り順調に進みスキーによる登行（シール操作）やワカンジキ、アイゼンの技術訓練、ザイル操作等多面にわたって講習が行われ指導員、講習者共に一体となって雪上技術の研修に汗を流した。行動の時はテントパーテイとは又別な組合せを作りそれ〴〵指導員補導員を若干名配置し行動を共にしたが第一ケルンにスキーデポ、第二ケルンまでゆっくり登行、再びデポサイト迄戻ってスキーをつけベースキャンプへ滑り下りるという至極慎重な行動に終始した。テントに戻ってからは指導員達が雪洞、イグールを、作ったりして初心者の参考に供し好評を拍した。

しかしその夜我々は実にゆううつだった。勿論例の焼失テントの件である。本部のテントの中では何時果てるともなくその善後処置について意見が交された。

二十三日の最終日は朝から小雪模様であったがスキー訓練が地元白馬山岳会のベテラン達の指導で予定通り行われその結果ともするとスキーを二次的に考える傾向を改めてより重要な登山技術の要素であることを認識させた。その後、直ちにテント徹収を指示し現地で雪の降りしきる中で閉会式が行われスケジュールを全て終了し開散、それ〴〵帰途についた。

反省

反省事項は種々あるがこの種の講習会では交流を計ることよりむしろ技術のレベルを平均化する方向に力を注ぐべきではなかろうか今回のようなインスタントパーティーによる方法は、返って目的と裏腹な結果となって現われ本来の目標を失う恐れがある。従って今後は対象を個人よりも山岳会単位に置き単独参加は認めずチームカラーを尊重しながら技術の面のみ格一化を計るという方向を確立する必要があろう。最后に地元白馬ケーブルに多大の御迷惑をおかけしたことを深くおわびする。

（山博学芸員大町山の会）

孝行猿の話

三石 紘

美和ダム周辺にサルが出没するといううわさを、私が初めて耳にしたのは確か昨年の秋だと記憶している。橋のらんかんにぶらさがっていたり、停留所の屋根で遊んでいたという話を聞き、私も是非確認したいと考え、群れをよく見かけるという戸倉山に出掛けてみた。まだ山麓には雪の来ない昨年の暮のことである。

南アの前衛峰の一部である戸倉山は全山ミズナラ、クヌギなどのヤブ山である。三峰川にそそぐ女沢をつめ、尾根を中心に一日中歩き廻った。沢の水は凍り、シカ、イノシシなどのものと思われる足跡がたくさんみられた。ときどきヤマドリが飛び立ちハッとさせられたが、サルの姿はなく、それのみか食こんも糞もなかった。サルを追跡するのは始めてのせいもあるが疲れただけの一日だった。

孝行猿の話

ところで仙丈山麓には、サルに関するエピソードが多い。その中でも地蔵尾根末端、柏木部落に伝わる「孝行猿」の話は有名である。この話の主人公は、現在、仙丈小屋の管理人高坂さんの祖先にあたる。

その昔、猟師の勘助お爺は、仙丈岳山中の広河原に小屋を作り、ここをベースとして、カモシカやクマを撃つ生活をしていた。広河原といっても現在の広河原小屋ではない。ある日、一日中歩き廻ったが獲物がない。しょんぼりとして山を下って来ると、アカマツの大木に大猿がいる。よろこんで撃ちとり、家に帰った。明日皮を剥ごうと思い、夜中に凍っては困るので、いろりのそばに釣って寝たさて真夜中に音がする。不思議に思って起きてみておどろいた。子猿が数匹で、すでに死んでいる大猿を相手に、しきりになにかしているのである。よく見ると子猿たちは一匹ずつかわるがわるいろりで手をあぶり、親猿の鉄砲疵を温めている。この情景をつぶさにみた勘助は、その孝心に感じ、非情な行為を続けてきた自分を後悔し、翌日女房にいとまをとらせ、頭をそり世をのがれて、一心不乱の念仏者となり、諸国行脚の旅に出た……これがあらすじである。勘助がねんごろにとむらったというサルの墓は、柏木部落の上部の登山路のそばにある傘松と呼ばれる枯れたマツの根本に苔むしている。登山の折は、注意して見るのも一興と思う。

この話は昔の修身の教科書「孝行」の項にのっていたそうであるから御存知の方もあると思う。今年から道徳の指導書が配布されるそうだが「孝行猿」がまたのっているかどうかは私は知らない。

サルのエピソード

「孝行猿」の話ほど一貫したストーリーにはなっていないが、他にも面白いエピソードは相当ある。サルが余りにも人間に酷似した形態、生態のためか、村人達との接触が多かったためか、擬人化されたサルのエピソードが南アルプス山麓には今でもあるのである。

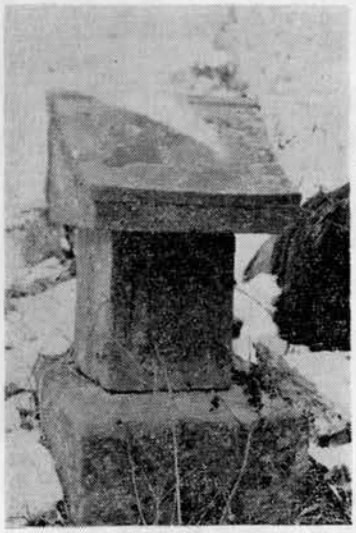
その一、猟師たちはサルに出逢ったり、サルの話を聞いたりすることをきらう。そしてよほど不猟の時以外はサルを撃たない。それは、サルが「去る」に通じることと、人間に似た動作があまりにも多いからだそうだ。遠山郷では、河原に遊ぶ姿が石工に似ているので「石屋づくりの若い衆」と呼び、決してサルとは言わない。

その二、サルは身体に松脂（トウヒの）をコチコチに塗って弾丸よけとしていた。背中に袖無しでも着たようにかためているので、猟師が撃つ時には、弾丸よけの松脂のない部分をねらう。勘助お爺も、塗ってない腹部に命中させた。また、半矢にしたサルを翌日みつけてみると、弾丸傷の穴に一握りの芝が、ガーゼ代りに入っていた。子ザルの仕様である。

その四、駒ケ岳のサルが集団で川干しをする。イワナやアメノウオをとるためだ。

このうちの四、については宮地伝三郎氏が「淡水の動物誌」で紹介し、「…こうした協同作業がニホンザルにあるとすると、動物心理学にとは重大である」と述べている。私のあげたエピソードも動物学的には、ナンセンスのことばかりかもしれない。けれども、これらの話は、その昔、村人と動物達とがいかに「密着した生活をいとなんでいたかということを暗示していて面白い。

（伊那里小学校教諭）



孝行猿の墓―柏木部落の上にある

トビ

長沢修介

北アルプスの嶺々はまだ真白く冬の姿であって、気まぐれな不連続線の通過は遅い春の雪を降らしたとしても、自然の移り変りは欺むくことなく必ずやって来る。

わずかな日溜りには野草が芽をのぞかせ、特にオオイヌノフグリなどは早くも紫の可憐な花をつけて精一っぱい春の来たことを告げてくれる。

小鳥達も晴天の日など、今迄と変った鳴き声をし、もう春がそこまで来たことを教えてくれる。留鳥であるトビも早春の日射を一っぱいに受けながら雄然と舞う姿は、初冬の何かうらぶれた淋しさを漂わす姿と違って、羽ばたき一つにも何かのどかさと希望に満ちた美しさがあった。

小谷の仏像

幅具義

雪深い小谷を訪ねると、急な山地のふもとに、これまた急な傾斜の萱ぶき屋根の寺がところどころに建っているのを見かける。この寺々に、古くから伝えられるすぐれた仏像があることは、世上にあまり知られていない。私も十年ほど前文化財保護委員会の倉田文作先生のお伴をしてこの寺々をめぐり、はじめてそれを拝したのであるが、そのときの印象をもとに、その二三を御紹介したい。

越後との境に近い北小谷来馬の常法寺には今を去る六年百前の南北朝時代の造像と目される銅製の弥陀三尊の立像がある。中尊の阿弥陀如来の像高は一尺二寸、左右の脇侍の観音・勢至両菩薩も一尺足らずの小さなものであるが、善光寺三尊の形式を備え、中尊の端麗・脇侍の童顔な中にも落ち着きを見せた面相といい、体軀全体に見られる均斉といい、なかなかすぐれた仏像である。いつの時代にか火災にあったものとみえて、三尊とも肌が荒れており、鍍金も今は見えず、元の光背や厨子も亡失し、造像のいわれは知るよしもないが、この地方に希れな古い時代のものであること、像容の優れた仏像であることは特筆すべきものがある。

中土中谷の神宮寺には、桧材を用いた桃山時代の一尺四寸ほどの十王像が安置されている。寺伝によると、天明三年（一七八三年）の火災で十王像も類焼したとされ、かって十体あったものが、今では三体を残すのみである。かっと見開いた眼・いかつく張った肩など十王像独特の像容であるが、地方作の素朴な表現であり、それだけに郷土につながる言うに言われぬ味をもっている。

神宮寺から中谷川を隔てた対岸の玉泉寺には、禅宗寺院の特色である寺僧の頂相がある頂相とは鎌倉時代におこった禅宗が、その興隆に力のあった禅僧を肖像画や彫刻にして師資相伝のしるしとしたものである。この寺の頂相は、大町市大沢寺の第十七世斧岩和尚をかたどるもので、彼は寛文二年（一六六二年）に他界しており、玉泉寺中興の傑僧であった。この像は寄木造で彩色を施し玉眼をはめた二尺四寸の頂相で、作風は中央作に近い整ったもので元禄頃の作と見られている。

この頂相と同時代作と思われる仏像が、南小谷千国の源長寺に数体安置されている。その一つは千手観音の坐像で、小さい体軀ながら仲々の入念作で、美しい仏像である。またこの寺には四尺余の像高を有する大元明王と達磨大師の二像がある。これは共に寄木造りの極彩色で、江戸中期の代表的作風が見られる優秀な作である。仏像といえば色あせ肌の傷ついたものばかり思わせる現代にあって、これは彩色も体軀も完全にもとのままに残り拝する吾人をして二百五十年の歳月のへだたりを感じさせないのは有難い。

（松川小学校教諭）

常法寺の弥陀三尊立像

スケッチ

。大町山の会はこのほど総会を開いて、新会長に長沢修介・副会長に松沢宗洋の二氏を選出した。

。今年は例年にない遅雪で3月24日には30センチも降雪があり、4月下旬の桜の満開も遅れる見込み。

。新年度切り替で「山と博物館」（送料共一ヵ年三〇〇円）は購読者募集中。

博物館ニュース

ネズミ除け施設完成

皇居のお濠りからきたコブ白鳥も今年で三年目を迎え、折からの陽光を浴びて最近巣造りを始めたが、昨年はふ化直後の雛がネズミに喰われてさんざんな目にあったので、地元関係者や協議会と相談して、ネズミ除施設をし、今年こそということになった。

金網の外側をトタン板で巻き、池と金網の間の土の部分に五分目の金網を敷きつめ、中央の保護島も石をつめて同様金網張りし、外から入るのを防ぐとともに、もしネズミが入っても巣をかけることができないようにしたのだが。

今年も山の自然科学教室を

山の自然科学教室も今年で八回を迎える。黒四ダムの開放の年でもあるので、今年は市内を中心に開設する計画で進んできたが、教室の開設期間が七月であり、しかも東京都の要請で三月中に決める必要に迫られて、市内民宿利用程度で大巾な変更は見込うす。

表紙説明

3月の爺ガ岳　種池小屋より

撮影　高橋　秀男

山と博物館　第九巻　第三号
一九六四年　三月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL（大町）二一一
大町山岳博物館
印刷所　大町市上仲町
信州印刷大町工場